小児の悪性黒色腫

小児の悪性黒色腫

山本 明史*¹ 山崎 直也*¹ 田口 理史*¹ 石原 和之*²

Summary

Malignant melanoma in children occurs quite rarely, but it seems to have different characteristics from those in adults. For 33 years from 1962 to 1994, totally 405 cases of malignant melanoma visited Dermatology Division of National Cancer Center Hospital. Out of them, 15 cases (3.7%) were children of less than 18 years old. The disease type was NM in 9 cases, SSM in 4 cases, ALM in 1 case and unknown in 1 case. Compared with adult cases, NM is more and ALM is less. The site of occurrence was the head in 1 case, neck in 1 case, trunk in 3 cases, forearm in 1 case, palm in 1 case, thigh in 4 cases, lower leg in 1 case, sole in 2 cases and unknown in 1 case. The distribution was quite different from adult cases. Precursor lesions of congenital giant pigmented nevus existed in 4 out of 15 cases (26.4%), but not definitely in other 11 cases. In the former group of 4 cases, the disease type was NM in 3 and unknown in 1. Two of 3 NM cases died and the prognosis was poor. In the latter group of 11 cases, NM occurred in 6, SSM in 4 and ALM in 1. Although 2 cases died, the prognosis was relatively good.

はじめに

小児における悪性黒色腫 (malignant melanoma, 以下 MM と略す) の発生は極めて稀であり, しかも成人例とはいくつかの点で異なる特徴を有していると思われる。特に発生母地として先天性巨大色素性母斑 (giant congenital nevocellular nevus, 以下 GCN と略す) が存在

する症例と存在しない症例がある。米国においても小児 MM 例は稀であり, 全 MM 例の 0.3~4% であると報告されている¹⁾。本邦においてもその発生数が少ないためまとまった報告が少ない²⁾³⁾。

1962年から1994年までの33年間に国立がんセンター中央病院皮膚科を受診した MM 症例は総計405例で, そのうち18歳以下の小児 MM 例は計15例 (3.7%) である。その15例について, 特に発生母地として GCN が存在する症例と存在しない症例に分けて retrospective に検討し, いくつかの特徴を見出したので報告する。

*¹ Akifumi YAMAMOTO, Naoya YAMAZAKI, Masahito TAGUCHI: 国立がんセンター中央病院皮膚科

*² Kazuyuki ISHIHARA: 皮膚がん予後統計調査研究所

症 例

1) GCNが存在していた1症例

症例4：8歳，男性

出生時より上背部から腰部にかけて巨大色素性母斑が存在し，1歳半時より某病院にてドライアイス治療を7年間受けていたところ左上背部に腫瘤が出現し，当科紹介された。1980年3月10日，当科初診(図1)。4月15日，腫瘍広範囲切除＋分層植皮，左腋窩リンパ節郭清施行。

病理組織検査(図2, 3)より，NM, level 4, tumor thickness 4.7mm, 所属リンパ節転移あり，Stage IIIと診断。術後 DTIC 100mg/day×5日間投与。その後，再発・転移はみられず，術後16年間経過した現在も経過良好である。

図1．症例4の当科初診時臨床像

図2．症例4の原発巣組織像

2) GCNが存在していない1症例

症例15：1歳8ヵ月，男性

1歳になった頃より，右大腿内側に黒色斑が出現し，1歳3ヵ月頃より隆起増大してきた。1994年7月4日，某病因にて7×7mm大になった腫瘤(図4)を辺縁より5mm離して切除を受け，当科紹介された。1994年7月15日，当科初診。

病理組織検査(図5, 6)より，SSM, level 4, tumor thickness 1.5mm, 所属リンパ節転移なし，Stage IIと診断。1994年8月2日，創痕より2.5cm以上離して広範囲切除施行。術後 IFN-β100万単位/回，計18回局注。その後，再発・転移はみられず，術後1年10ヵ月経た現在も経過良好である。

図3．症例4の所属リンパ節転移組織像

図 4 . 症例15の前医受診時臨床像

図 5 . 症例15の原発巣中央部組織像

図 6 . 症例15の原発巣辺縁部組織像

考 察

1962年から1994年までの33年間に国立がんセンター中央病院皮膚科を受診したMM症例は総計405例で、そのうち18歳以下のMM小児例は計15例(3.7%)であり、その15例についてまとめたものが表1および表2である。性別は男性10例、女性5例で男女比2:1で、初診時年齢は0~9歳が6例、10~18歳が9例で、平均年齢9.6歳である。原発部位は大腿4例、躯幹3例、足底2例、頭部、頸部、前腕、手掌、下腿および不明各1例であり、成人例とは異なった分布をしている。病型はNM 9例、SSM 4例、ALM 1例、不明1例であり、成人例に比しNMが多く、ALMが少ない。病期はI期7例、II期

2例、III期3例、IV期3例であり、その予後は4例が死亡し、その他は生存中である。発生母地としてGCNが存在する症例(GCN例とする)は4例(26.7%)およびGCNが存在しない症例(非GCN例とする)は11例(73.3%)である。

この小児MM 15例についてGCN例および非GCN例に分けて検討したものが表3である。性別は非GCN例において男性8例、女性3例と男性が多い。初診時年齢はGCN例平均3.1歳に対し非GCN例平均11.1歳であり、GCN例は比較的幼少時に発生すると思われる。原発部位はGCN例3例とも躯幹であるのに対し非GCN例は躯幹以外に発生している。病型はGCN例3例ともNMであるのに対し非GCN例はNMの他SSMおよびALMも存在する。

表 1. 当科における悪性黒色腫小児症例の一覧表

	氏 名	性	年齢 (歳)	初診日	原発部	病型	病期	レベル	厚さ(mm)	予 後	先天性巨大 色素性母斑
1	栗○徳○	男	8	73.7.2.	頭部	NM	Ⅳ	3	不明	9ヵ月死亡	なし
2	新○晴○	男	10	76.4.9.	右大腿	NM	Ⅲ	3	7.0	6年1ヵ月死亡	なし
3	近○啓○	男	11	77.6.17.	頸部	NM	Ⅰ	3	1.5	生存	なし
4	堀○弘○	男	8	80.3.10.	左肩	NM	Ⅲ	4	4.7	生存	有
5	増○剛○	男	8ヵ月	81.5.8.	側胸部	NM	Ⅱ	4	2.5	生存	有
6	深○垂○	女	3	82.12.13	手掌	NM	Ⅰ	2	1.0	生存	なし
7	小○温○	女	1	83.5.12.	背部	NM	Ⅳ	5	8.0	8ヵ月死亡	有
8	桐○秀○	男	16	83.8.31.	右大腿	NM	Ⅰ	3	不明	生存	なし
9	鈴○康○	男	13	84.3.30.	左大腿	SSM	Ⅰ	3	不明	生存	なし
10	安○ 一	男	18	84.6.22.	左足底	NM	Ⅲ	3	5.0	生存	なし
11	吉○由○	女	14	85.5.10.	左前腕	SSM	Ⅰ	2	0.75	生存	なし
12	永○泰○	男	13	86.7.27.	右足底	ALM	Ⅰ	2	0.7	生存	なし
13	杉○真○	女	15	92.10.9.	右下腿	SSM	Ⅰ	2	1.2	生存	なし
14	林 ○子	女	12	93.2.23.	不明	不明	Ⅳ	不明	不明	1年7ヵ月死亡	有
15	安○隼○	男	1	94.7.15.	右大腿	SSM	Ⅱ	4	1.5	生存	なし

表 2. 当科における悪性黒色腫小児症例のまとめ

性 別	男 10例 , 女 5例
初診時年齢	0～9歳 6例, 10～18歳 9例 (平均年齢9.6歳)
原発部位	大腿4例, 軀幹3例, 足底2例, 頭部, 頸部, 前腕, 手掌, 下腿および不明 各1例
病 型	NM 9例, SSM 4例, ALM 1例, 不明 1例
病 期	Ⅰ期 7例, Ⅱ期 2例, Ⅲ期 3例, Ⅳ期 3例
レ ベ ル	2:4例, 3:6例, 4:3例, 5:1例, 不明 1例
予 後	生存 11例, 死亡 4例
先天性巨大色素性母斑	有 4例, 無 11例

病期はGCN例が進行例が多いのに対し非GCN例はⅠ期など比較的早期のことが多い。レベルはGCN例が4, 5など深く浸潤している症例が多いのに対し非GCN例は2, 3など比較的浸潤が浅い症例が多い。予後は非GCN列の方が生存例が多く, GCN例より比較的予後がよいと思われる。

以上のごとく国立がんセンター中央病院皮膚科における小児MM 15例について検討した。

全MM症例のうち3.7%を占め, その病型・原発部位は成人例と異なった傾向を示し, また26.7%にGCNが存在していた。GCN例と非GCN例との比較では性別, 初診時年齢, 原発部位, 病型, 病期, レベル, 予後などにおいて異なった傾向がみられた。

今後さらに症例を重ね検討を続けていきたい。

表 3. 当科における悪性黒色腫についての先天性巨大色素性母斑の有無によるまとめ

先天性巨大色素性母斑の有無	有 4 例	無 11 例
性 別	男 2 例 , 女 2 例	男 8 例 , 女 3 例
初診時年齢	0 ~ 9 歳 3 例, 10 ~ 18 歳 1 例 (平均年齢 3.1 歳)	0 ~ 9 歳 3 例, 10 ~ 18 歳 8 例 (平均年齢 11.1 歳)
原発部位	躯幹 3 例, 不明 1 例	大腿 4 例, 足底 2 例, 頭部, 頸部, 前腕, 手掌, 下腿 各 1 例
病 型	NM 3 例, 不明 1 例	NM 6 例, SSM 4 例, ALM 1 例
病 期	I 期 0 例, II 期 1 例, III 期 1 例, IV 期 2 例	I 期 7 例, II 期 1 例, III 期 2 例, IV 期 1 例
レ ベ ル	2 : 0 例, 3 : 0 例, 4 : 2 例, 5 : 1 例, 不明 1 例	2 : 4 例, 3 : 6 例, 4 : 1 例, 5 : 0 例
予 後	生存 2 例 , 死亡 2 例	生存 9 例 , 死亡 2 例

文 献

- 1) Andrew, M.D., Constance Clirrincione, M.S., Hilliatd, F.S.: Malignant Melanoma in Children. Ann. Surg. Oncol., 1: 278-282, 1994.
- 2) 石原和之: 悪性黒色腫. 小児内科, 19: 288-292, 1987.
- 3) 福井良昌, 小野博紀, 梅村忠弘, 他: 小児の悪性黒色腫. 日皮会誌, 100: 597-605, 1990.